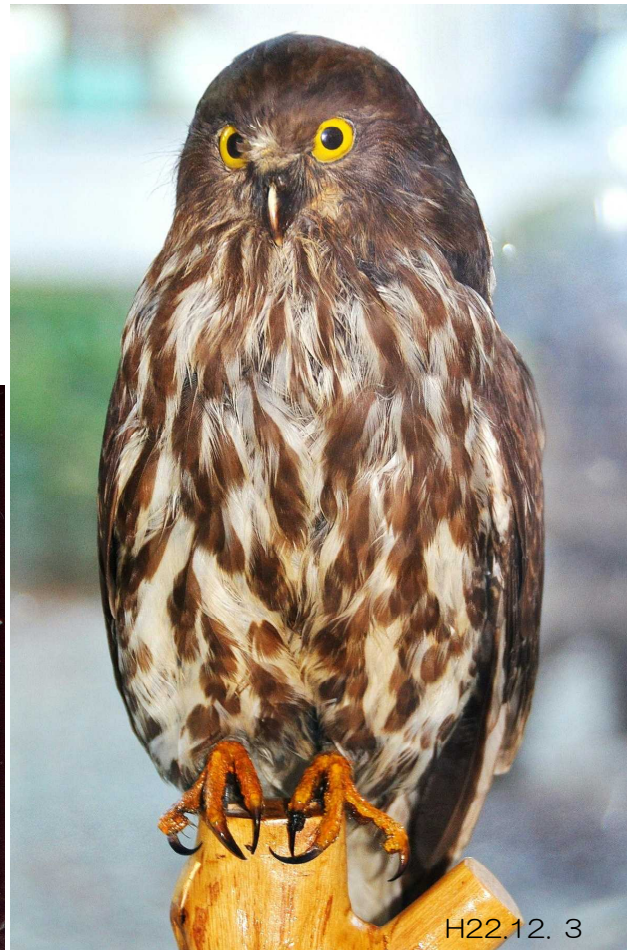


アオバズク 【青葉木兔】



「動物たちの地球」(朝日新聞社)より



H22.12. 3

8月25日(水)夏休みの課外が行われていた朝、生物準備室に一羽の鳥の死骸が運ばれてきた。公仕の落合さんによると、職員室から教室に通じる渡り廊下入り口のガラス戸の下で死んでいたという。前日はなかったので、おそらく夜の間に激突してそのまま死んでしまったのだろう。県内で数少ない剥製業者である「鳥貞」(宇都宮市)さんによると、この鳥は「アオバズク」で、めったにお目にかかれない貴重な鳥だということなので、剥製にして残すことにした。

アオバズクは、フクロウの仲間で、4月下旬、日本を訪れて繁殖をし、秋には越冬地である東南アジアに旅立つ夏鳥である。**新緑(青葉)の頃**に日本にやってくることから「アオバズク(青葉木兔)」という和名がついている。木兔(ズク)はフクロウを意味しており、「ミミズク(耳木兔)」などと同様である。

栃木県では、レッドデータブックで**絶滅危惧Ⅱ類**(Bランク：絶滅の危険が増大している生物)に指定され、「近年著しく減少している」とのことである。平野部から山地の森林や人家付近の神社、屋敷林などの大木のある林などに生息することから、そうした生息環境の悪化が減少の要因なのであろう。夕方暗くなってから活動し、「ホー、ホー、ホー」と鳴くという。ガや甲虫類などの昆虫類に加え、コウモリ類や小鳥類も飛びながら捕らえているそうだ。

今回の個体は、おそらく、佐高に隣接する**朝日森天満宮**の大木をすみかとし、夜、エサを捕食しようとして佐高のガラスに激突してしまったのではないかと推測される。剥製業者の「鳥貞」さんによると、「貴重な剥製です。アオバズクとしてはやや大きめでメスではないか。」ということだ。つい先日完成した剥製は、佐高ミュージアムとして、現在、正面玄関で展示中である。